

『自らの知徳を磨け、そして生かせ』

公益社団法人埼玉県診療放射線技師会
会長 小川 清



診療放射線技師は、戦前からの結核撲滅対策による胸部単純撮影や、胃がん検診対策の胃透視検査などにより成長・発展を遂げてきた。そして昭和50年代から

のCT・MRIといった新しいモダリティの導入は、ICTの進歩やその関連技術の著しい進歩により診療放射線技師業務を大きく変貌させた。加えてPACSなどの医療情報への関わりや近年のチーム医療に基づく業務拡大により、診療放射線技師業務のより発展的拡大が期待されている今、もう一度、診療放射線技師について考えてみたい。

この世に生を受け、義務教育を終え高等学校そして専門学校へ。現在では大学へ進学し技師になるべく教育を受けて国家試験に受かり、国家資格である免許を取得する。この国家資格免許により生活が成り立っていくわけだが、それだけではない。この世に生を受けること、すなわち社会に役立つことであり、役立つことをするためには、どうすべきか。それは自分の玉を磨くことであり、磨き続けること。当然ながら自分の玉は他人が磨き続けることはできない。自分を自分で、激励し磨き続けなれば「玉」は錆びる。光り輝く玉にしておくには、たえず磨くことが大事である。そして光り輝く玉をどのように使うのか。社会に貢献するという自覚が求められる。

自分をどう生かしていったら良いのだろうか。技師会や学会などに参加したら「与えられたチャンスを生かす」こと、目的を明確に検証し考察を

発表することで専門家の意見を聞き「目的意識をもって業務を遂行し達成する」ことで大きく成長できる。この成長力を生かして職場で評価される人間になってほしい。職場での理解を得るためにはどうしたら良いのだろうか。上司・同僚・そして職場全体の理解をどのように得るのか。

リーダーには何が必要だろうか。その組織目標に準拠した理念を持ち、豊富な知識と経験からメンバーを導くためには、人格・品性・指導力が求められる。勤務先のみならず、例をあげれば学校PTA役員やスポーツ指導者など、積極的に担当し研鑽を積んだ人が組織リーダーになってほしい。もちろん「役職が人をつくる」ことは十分あるが、現在、人の成長をゆっくり待ってくれる時代ではなく、待たなしの状況である。

「検査一連行為」という検査室で起こった現象には、診療放射線技師が責任をもってケアし、状況に応じて緊急スタッフを速やかにコールして患者の安全を守るという意識と、医療画像作成責任者という大きな成果物責任という自覚を持ち、常に患者側に立った医療スタッフとしての診療放射線技師をより目指してほしい。サービスを提供し、お金を支払っていただき、そして「ありがとう」と言ってくれるような職業が他にあるだろうか。

最後になりますが、平成25年度総会時に会長職を退任させていただきます。理事時代から常任理事・副会長・会長と約35年間、支えてくださいました役員、会員の皆様に厚く御礼申し上げます。